

平成元年十二月三日（日） 郷土研究会資料

第一七二回 史跡めぐり案内

日光御成道を訪ねて

和戸駅周辺の史跡と
鶯宮町 鶯宮神社

越谷市郷土研究会

第一七一回 史跡めぐり案内

とき 平成元年十二月三日

集合 越谷駅前東口 午前九時二〇分

午前九時四一分発 準急 館林行乗車

行先 日光御成道（和戸駅周辺の史跡）と鶯宮神社

コース 越谷駅―和戸駅（宮代町）―日光御成道―大落古利根川治水記念碑（杉戸町）―東大寺跡、西行法師見返りの松、永福寺―天満宮の榎（まき）―因幡池―和戸駅―鶯宮駅―鶯宮上町農村センター―昼食―鶯宮神社、催馬楽神楽参観（国指定重要無形民俗文化財）―霊樹寺―鶯宮駅―越谷駅 解散

案内者 理事 鈴木 秀俊

参加費 金一、七〇〇円（交通費、資料代、謝礼など）

主催 越谷市郷土研究会

〔大落古利根川〕

江戸初期の大改修以前の旧利根川の下流部にあたる流路で、排水路としての役目が大きいのでこの名がある。羽生市川俣から加須を経て鷲宮に至る間は、昔の名称で会の川と呼ばれる。これより下流越谷付近の中川（庄内古川）との合流点までを古利根川といい、さらに下流は今では中川と呼んでいる。旧利根川はこの河道を流れ、さらに入間川（現在の荒川）を合わせて東京湾に注いでいた。

江戸を水害から守るため、幕府の命を受けた伊奈忠治・忠克親子が利根川の流路を渡良瀬川から、更に鬼怒川に結び付ける大工事を進めた結果、（一六五四）現在の利根川の河道ができた。それと同時に、古利根川も現在の河道の名称となった。今では県東部低地の水田地帯を流れる幹線排水路として、大小の排水路を併せて、八潮市東部から東京都に入り、東京湾に注いでいる。

〔大落古利根川治水記念碑〕 杉戸町大字下高野 和戸橋傍

毎年の洪水に苦しむ流域農民の熾烈な要望によって、埼玉県は大落古利根川と諸支川の根本的改修をするため、大正八年に起工し、使役人員七十二万六千人、事業費総額百九拾九万九千四百七拾参円と十六年の星霜を費し、昭和九年に竣功したと記されている。

正面題字は内閣総理大臣海軍大将 岡田啓介書 裏面撰文 埼玉県知事 飯沼一省

〔高野砂丘と一里塚〕

杉戸と幸手の間で、古利根川は凸部を西側へ向けて大きく蛇行している。この曲流の風下に形成された河畔砂丘が高野砂丘で、標高は一〇メートル以上、最高点は一六・二メートルとなっている。ここを通る日光御成街道には一里塚が残され、県の史跡に指定されている。

〔永福寺〕

北葛飾郡杉戸町下高野にある新義真言宗豊山派の寺院で龍灯山と号す。幸手町平須賀の宝聖寺末。本尊阿弥陀如来は行基の作と伝う。円融天皇の御代、僧覚宥によって中興する。現在の一〇間×九間の本堂は幕末の建築である。

下高野の大施餓鬼



永福寺ご本尊・阿弥陀如来像

旧県道（今は町道）に面して「西行法師見返りの松」があり、その左に「高野大せがき寺」の石標が立ち、臨に「杉戸町歴史散歩・八番」の杭がある。

山門に向かって左手に間廬堂、右手に観音堂、観音堂の傍に宝曆の宝篋印塔が建つ。山門を入る右手に鐘樓があり、新錡の梵鐘を掛けている。本堂の左手前に二本の公孫樹。奥の樹は四、五百年は経ているかと想える古木である。人っ子一人見えぬ静寂そのものの境内に、ぼとん、ぼとんと銀杏の実が熟れて落ちる音だけがある。これだけの樹ならカマスに何依もの銀杏が取れるに相違ない。右手奥は新しい建築の客殿。その前に弘法大師の立像と、八十六世大僧正龍観和尚彰徳之碑が立つ。本堂の左手奥には、その龍観和尚が子第八百余人を教育したという「精華塾」の建物と位牌堂がある。

先頃からもよおしていた空が時雨れて、雨がばらばらと公孫樹の葉を打つ。西行がこの寺を訪れたのも、或はこんな時雨れ日だったかも知れない。長唄に「時雨西行」というのがあるのを思い出す。西行には時雨が似合うのかも知れない。

まだお若い住職の山高龍恒師は、聞けば八十九代の由。ちよつと驚く。「新記」は「(創建の)年代は伝へず。開山詳ならず」というが、寺伝によれば、創建は神亀三年八月、行基菩薩を開山とし、開基は土地の豪族地主堅という。神亀といえは聖武天皇朝である。千二百年以上も昔のこととなる。とすれば八十九世も合点がゆく。

「新記」はこの寺の「施餓鬼の縁起、及び間廬王日尊に示すの偈などあれど、妄誕怪異取るに足らず」として、捨て去って語らない。しかしこの寺を取材して、落としてはならぬ最大の記事は、もちろん「大施餓鬼」の事である。それを語らなくては、何のための施餓鬼か分からず、お話にならない。取って私を語らなくては、怪異不思議は寺の縁起などには、必ずと言って良い程ある事である。それを鼻の先きで笑い飛ばすか、その妄誕の説の中

から何かを探り出すかは、聞く人の自由であろう。

長福卿と「因幡池」由来

時代は正平（南北朝時代）の頃、高野の城主に長福卿（因幡）という人がいた。武勇の誉たかく、刃むかう敵もないところから、次第に慢心増長して、上を上とも思わず、神仏をも崇めず、民を虐げ、その悪虐の行いは次第に募り、果ては盲人など生かして置くは国の費えとばかり、穴を掘って埋め殺してしまい、酒興に妊婦の胎を割いて胎児を引き出して楽しんでやるまでになってしまった。悪鬼羅刹と雖もこれにまさるまい。しかし奥方は優しい心根の人で、天を仰いで歎き、地に伏して夫の心の改まるのを祈ったが、その効いもなかった。奥方は思いつめて、八歳になった我が子に教訓して比叡の山へ送り、自分は夫を諒める遺書を残して、自刃して果ててしまった。

山に登って修行した子は、二十五年の春秋を勉強に励み、やがて日尊法師となり、三千坊の学頭となって人々の尊敬を受ける身となった。

故郷に帰った日尊は、至誠をこめて父に説法し、さすがの長福も前非を悔いて、一寺を建てる程になったが、その寺が落成の日に、落馬し狂い死にした。折からの利根の洪水は野に溢れ、長福の死骸を何処へか流し去ってしまった。やがて水のひいた後には、ただ一つの池が残った。それが今もある因幡の池である。

孝心深い日尊は父の行方を求め、またその菩提のためにと十七日間の断食をし、修法読經に余念もなかったが、満願の日の夢寐の間に、閻魔の庁に招かれて、阿鼻の地獄に落ち、猛火に焼かれ、苦し熱しと苦悶している父の姿を見た。焼けただれ七転八倒する父の姿に、日尊は泣く泣く閻魔王に教えを乞うた所、閻魔王の告げて言うには、抜苦与楽の妙法は、施餓鬼に過ぐるものなしと、施餓鬼の法と偈とを授けて呉れた。日尊が気が付き我れに還ると、それは明徳三年の秋七月二十三日であった。

永福寺山門



そこで日尊は直ちに因幡の池に百人の僧を迎え、閻魔王直授の法を修したところ、その夜、池から竜王の竜燈奉獻の奇瑞があった。よってこの日から寺を竜燈山長福寺と名付けて、今日に至っている。

現在は、旧暦七月二十三日を改めて、八月二十二日、二十三日に昔ながらの「大施餓鬼会」が行われている。参列する衆僧は智山派の人も（この寺は豊山派だが）あり三十五人。

信者は埼玉はもちろん、東京、千葉、茨城、栃木その他から毎年四、五万人が雲集する。

本堂から因幡池までの練供養、信者が故人の冥福を祈るため鰯を放魚する行事などがある。そして境内外に露店が揃比して大いに賑わい、ふだんは静寂の寺周辺も、この日ばかりは別世界の趣きを呈する。

今はまぼろしの「東大寺」

明治初年の墮仏毀釈によって廃寺となり、門前にあった「見返りの松」だけが残り、その他は一物もとどめないが、昔、永福寺の北隣りに、東大寺と称する伽藍があった。

「新記」によれば、この東大寺は素復山と号し、本山派の修験であり、聖護院門跡配下で、年行事役を勤めていた。本尊不動の立像は智證大師（因珍）の作であり、昔は阿達羅堂と称する草堂に過ぎなかった。阿達羅は不動尊のことである。

文治二丙午（一一八六）年冬、奥州に下ろうとした西行法師（一一一〇—一一九〇）が、この堂まで来たが、折柄の尺余の積雪と、旅の辛苦が重なって、もう先きへ進むことも出来ず、

捨て果てて身は無きものと思へども

雪の降る日は寒くこそあれ

の一首を絶えだえに詠んで、行き倒れてしまった。縁起に「薄食乏勞倦辛苦」とあるから、栄養失調か。また「衆民視之猶如死者」とあるから、氣息奄々いまにも死ぬかと思う状態であったのであろう。

もちろん、西行とは北面の武士佐藤義清のことである。武芸にも秀でていたが、特に和歌にすぐれ、歌麈の巧者でもあったという。若くして出家遁世した時、人々は「重代の勇士を以って法皇に仕え、俗時より心を仏道に入る。家富み年若くして心無欲。遂に遁世、人々嘆美」したという。出家の原因については後世いろいろ推理され、或は好きな和歌に徹するため——牧歌の遁世といい、或は仏門への憧れというが、武士の世界というより、当時の政治の汚らしさに嫌気がさして、くだらぬ形而下の世界から逃避したのではあるまいか。特に彼は漂泊を夢見る性格が強かったのかも知れない。そして晩年は牧歌から脱却して仏道一途に生きるのだが……。

永福寺伽藍——「東大寺」は山門手前、右側にあった



彼は生涯の内で陸奥への大旅行を二度こころみている。一度は二十代の時であり、再度は晩年の六十九歳の時であった。ここの東大寺に来たのは、そのどちらか？ 縁起の文治二丙午年を信用すれば、晩年六十九歳の時であったようである。

昔の人はみな人情に厚かった。行き倒れている老僧を見つけた村人達は、これを東大寺に運び込み、新しい衣服に着換えさせ、薬湯を与え、日々交



大きな木の下に、ひっそりと無縁墓地在……

替して看病したので、西行も冬至の頃にはすっかり健康を取り戻したのであった。

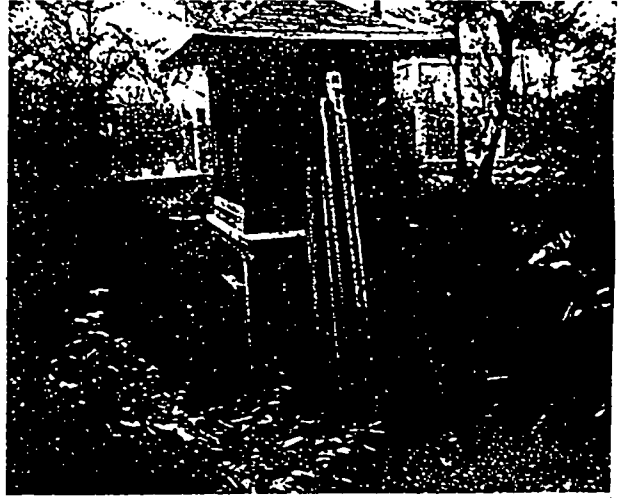
病中彼は寺の住持や村人に、問われるままに語ったであろう。自分が西行であることを。また先日鎌倉で頼朝に逢い、和歌の道について語ったことを。そして今はこれから奥州の平泉に藤原氏を訪れる旅の途中であったことを。また彼の接触した当代の権力者達——鳥羽院、崇徳院、藤原頼長、入道信西、平清盛ら——の事も。また日によっては、やさしく歌に托して釈尊の教えを説いたかも知れない。

村人達はその話にうたれ、その徳に感化され、長くこの地に留まって呉れるよう懇願したが、西行には東大寺大仏再興勸進の使命があつて、それは出来ない。やがて奥州への出発の日となる。恰も西行の病の癒えた日が冬至であつた。そして冬至の翌日からは疊の目一つずつ陽が伸びる。天地一陽来復の日である。そこで西行は村人達の親切を感謝しつつ、戟れにこの草堂を「来復山としたらどうですか」と提案し、村人達は掌を打って喜んで、阿逓羅堂に「来復山」の山号をつけて、長く西行との所縁を偲ぶすがともしたのであつた。

その後、東大寺の重源上人が、南都東大寺の再建勸進のために下向して、この村に来、西行の話をつれ、大いに喜び、この堂に逗留した。遠近の衆庶らこれを伝え聞いて続々と来集し、重源の勸進に協力した。

重源上人も大いに喜び、来復山阿逓羅堂に「東大寺」の寺号を許した。村民また力を併せて、南都東大寺の堂宇を手本に結構した。かくして東大寺はこの地方切つての大寺となり、法燈をにかけて西行を開山第一世、重源上人を第二世としたという。

時は移つて第九世の道秀は菅原氏。元弘の頃京から下つてこの寺に入った。この道秀は僧侶ながら文武に秀でた熱血漢で、正暦二（一一三三）年新田義貞の挙兵に馳せ参じ、鎌倉に攻め入つて武功を建てた。この功によつて新田義貞はこの寺に黄金、米穀などを贈り、また境内地として八町歩を寄附した。道秀はこれをもつて堂塔を建て、寺は益々輪奐の美を加えた。



因幡池——ここに水を張り泥鰌が放される

この道秀を寺の中興開山として
ている。道秀までは清僧これを
を相伝したが、道秀からは修
験に転向、子孫が相続して来
た。以上は縁起の大略を（若
千私見も入ってしまったが）
現代文になおしたものである。
この縁起の原文は道秀の玄孫
道明という人が書き遺したも
のである。

来復山東大寺は冒頭に書い
た様に今はなく、ただ永福寺
門前右手前に「西行法師見返
松」（それも何代目かの松だが）
が、あるばかりである。松の
根本に一メートルばかりの角

柱の石標があり、側面には、

道いそぐ遠近人も駒とのて

みかへり松をみかへざらめや

と彫つてある。作者の名はないが、縁起では高師直作となつてゐる。

この見返り松について、縁起は「（前略）而出 唯願庭再一古松樹 走去
而已 村人呼此樹而名西行見回松云々」と記している。しかし「龍燈山伝
燈記」は同じ事を「出テ庭前ノ一古松ヲ願ミ、恋々ノ情アルモノノ如シ。
終ニ走り去ル」と書いてゐる。ともあれ温情の村人達に心を惹かれつつ去
る西行法師の姿を彷彿とさせるのである。

「一切の生きものに対して暴力を加えることなく、一切の生きものものい
ずれをも悩ますことなく、また子女を欲するなかれ、況や朋友をや。犀の
角のようにただ独り歩め」

その釈迦の教えに従うには、武士を捨てねばならぬ。愛恋の思いを捨て
ねばならぬ。家庭を捨てて愛する者とも別れねばならぬ。朋友を求めそれ
に甘えてはならぬ。犀の角の一角であるが如く、孤独に生きねばならぬ。
西行の西は西方浄土の西であろうが、また犀の一角の犀であるかも知れな
い。自分の像をさえ残してはならぬと言つて木像をなげうつた西行ゆかり
の東大寺が、いま跡形もないのは、いかにも象徴的である。それにしても
仏陀の教えはきびしく淋しい。そして旅を行く西行の後ろ姿も……。

所在地 北葛飾郡杉戸町下高野三九六番地

住職 山高龍恒師

交通 東武伊勢崎線和戸駅下車。徒歩約十五分。バス

の便はないから歩いて貰うより他にない。古利
根川を渡ると新県道下高野杉戸線に出る。寺へ
は新道からも入れぬことはないが、裏の墓地か
ら入るようになるので、旧県道の方に回つてい
ただこう。

永福寺門前にある「西行見返りの松」碑



【天満宮の榎（まき）】

天満宮の境内にあるイヌマキの巨木で、樹令六〇〇年といわれる。

高さ 二十二メートル

幹の太さ 四メートル

（杉戸町天然記念物）

【鶯宮町】

北葛飾郡。人口約三〇、一〇〇人、面積一三、七三平方キロメートル。東武伊勢崎線鶯宮駅と東北線東鶯宮駅がある。

県の北東部に位置する町。東は幸手町、南は久喜市、北西は加須市、北は栗橋町に各々接している。昭和二九年九月、旧鶯宮町と桜田村の一部が合併して誕生した。

町は古利根川に沿う沖積低地を占め、所々に海拔一〇メートル前後、比高三メートル程の台地が散在する。町域の北西部、古利根川の自然堤防上に形成される首邑の鶯宮市街は、鶯宮神社の門前町として、鎌倉時代に開かれたといひ、江戸時代には、市場町を兼ねて発展し、五・十の市日は穀類・木綿の取引で賑わった。

産業面では、農業が中心で米作りのほか、野菜のハウス園芸、ナシの栽培などが行われるが、近年、宅地が進んでいる。

見どころとしては、鶯宮神社、寛保治水碑、霊樹寺、宝泉寺池などがある。

【鶯宮神社】

旧県社で、鶯宮駅の北、徒歩約十分、鶯宮市街の西の外れに鎮座する。祭神は、天穗日命、武夷鳥命、大己貴命など九神、今から一、九〇〇年余り前の景行天皇の御代、日本武尊の創建、あるいは古くは土師の宮と称し、出雲族の草創ともいわれて社歴は古い。伝えはともかく、神社境内付近には、縄文く平安時代の遺跡（県指定史跡・鶯宮堀内遺跡）が散在して、このあたりが早い時代からひらけたことが知られる。

中世には、武神として諸武将の崇敬を集め、建久四年（一一九三）源頼朝の神馬奉獻、社殿造替。建長三年（一二五一）北条時頼（鎌倉溟府五代執権）の神樂奉納、正應五年（一二七二）北条貞時（鎌倉幕府九代執権）の社殿造営、應安五年（一三七二）小山義政の社殿修復などが、神社所蔵文書に記録されている。室町期には古河公方足利氏代々の手厚い保護を受け、天正十九年（一五九一）徳川家康から県内では最高の四〇〇石の朱印地を寄進された。

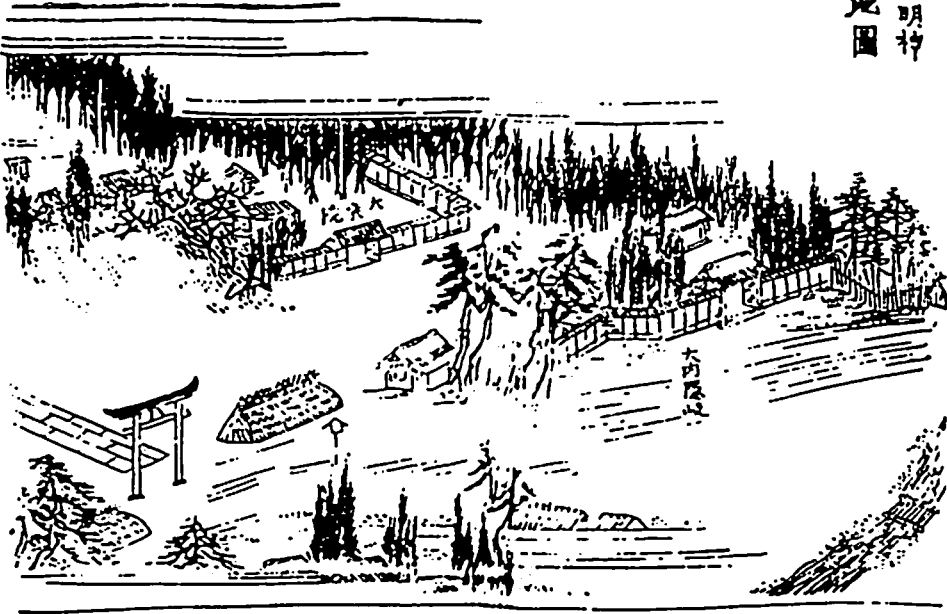
神域は広く約三四、〇〇〇平方メートル、藪蒼と茂りあう杉木立に囲まれて、安政六年（一八五九）造立の社殿、それに向いあつて神樂殿がたつ。社室には国指定重要文化財の太刀や、県文化財の鏡、古文書などがあり、神社に伝承される『土師一流催馬樂神樂』は、国の指定重要無形民俗文化財になっている。

むかしは“大鳥大明神”とも呼ばれたが、その大鳥が“取り”に通じるため、江戸時代から得点を祈る商人の参詣が多かった。今も十二月初酉の日の“酉の市”は、近在からの人出でにぎわう。

※鶯宮催馬樂神樂（国指定重要無形民俗文化財）

一名、土師一流催馬樂神樂と称し、神樂歌に平安時代の俗謡である催馬樂を採りいれている点に特徴がある。一曲一座形式の十二座という曲目構成で奉奏されるようになったのは、宝永五年（一七〇八）ごろからであることが、天保年間（一八三〇く一八四三）に藤原国政記すところの「鶯宮古代神樂正録」などから知ることができる。組織は舞人のほか笛・大拍子・大太鼓・謡方からなる。各曲は記紀の国家起源神話を首題にしており、

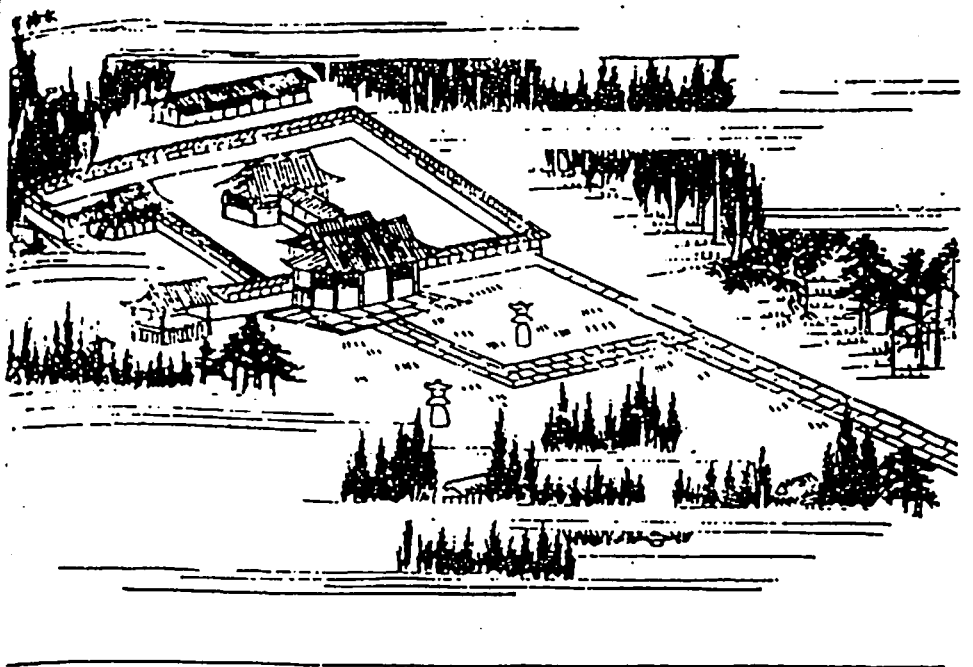
神明社
地圖



関東の江戸神楽の源流をなすものといわれる。二月一四日、四月一〇日、七月三十一日、一〇月一〇日、十二月
初四日、一二月三十一日に演じられる。

※所蔵の文化財

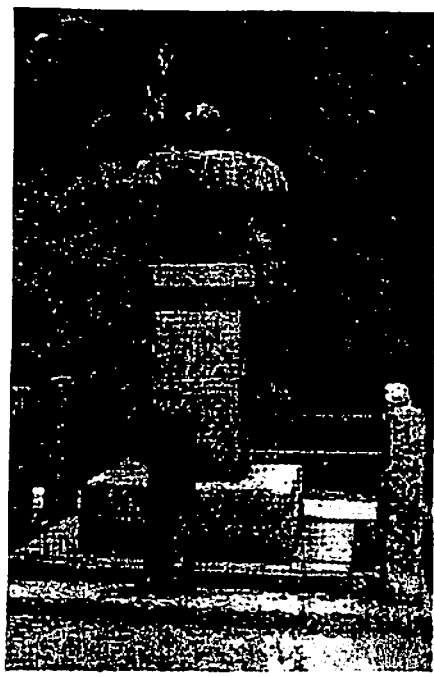
- 一、太刀一口 重要文化財
 国指定（大正三、四、一七）銘「備中国住人吉次作」「永和
 二年卯月十九日（一三七六）小山下野守義政寄進」
- 二、銅製双鶴蓬菜文鏡 一面
 県指定有形文化財（工芸品）指定（昭和三一、一一、一）鏡
 倉時代の典型的な鑄造
- 三、銅製桐紋方鏡 一面 沈金彫鏡筥 一合
 重美指定（昭和一六、七、一七）（工芸品）県指定有形文化
 財（昭和三九、三、二七）桃山時代の白銅製方形の鏡と筥
- 四、銅製蓬菜文鏡 一面
 重美指定（工芸品） 県指定有形文化財 室町時代中国の伝
 説にもとづいた蓬菜山文様の銅鏡
- 五、銅製御正体 二面（工芸品）
 重美指定 県指定有形文化財 室町時代の作 文安二年（一
 四四五）長禄二年（一四五八）の銘あり
- 六、鷲宮神社古文書 古文書二十四点 県指定有形文化財
 室町時代から戦国時代の中世文書、足利氏、北条氏、太田氏



※聖 跡 境内に明治天皇の聖跡碑三基あり、町内にも二基あり、社務所内に御小休所現存する。聖跡碑題目は、
 伯爵 金子堅太郎謹書、及び徳富蘇峯恭書、碑文は渡辺幾治郎謹書。

※寛保治水の碑
 に関するもの、棟札一枚 文禄四年社殿造営に関するもの

鷺宮神社の境内、拜殿前にたつ石燈籠で、江戸時代中期の寛保三年（一七四二）、空前の大雨による利根川決潰のさい、幕府の命により、西国の諸大名とともに、堤防修築にあたった長州（山口県）萩藩主毛利宗広が、工事の完了後、鷺宮神社の加護を感謝して奉納したものである。「刀禰上流以南修治告成碑」服部南郭の撰文、長州学士津田泰之謹書 高さ二、六メートル



(寛保治水の碑)

願書

武藏國太田庄鷲宮大明神

右意趣者天下泰平武運長久

特今度凶徒等悉令退治方

屬本意者以是三郡并寄郡

段錢為当社之修造可奉寄進

之立願狀如件

享徳五年正月十日

左兵衛督源朝臣成氏

27.4 cm X 38.7 cm

8 足利成氏願文(鷲宮神社所藏 埼玉県立博物館寄託)

願書

武藏國太田庄鷲宮大明神

右意趣者、天下泰平・武運長久、

特今度凶徒等悉令退治、方々

屬本意者、以足立郡并寄^(邊)西郡之

段錢、為当社之修造可奉寄進

之立願狀如件、

享徳五年二月十日

左兵衛督源朝臣成氏(花押)

享徳四年(一四五五)正月に鎌倉を發つた成氏は、三月までに古河に入り、上野・下野・武藏で合戦を繰り広げていた。十二月には上杉方の埼玉城(現騎西町)を攻め落している。こうした中で、翌五年、成氏は御料所太田莊(現北埼玉郡から南埼玉郡にかけての地域)の総領守ともいふべき鷲宮明神に凶徒等の退治を祈願し、足立郡や埼玉郡の段錢を当社の修造料として寄進することを約したのである。

享徳四年七月二十五日、享徳は康正に改元されているが、朝敵となっている成氏は、父持氏が永享改元後も正長年号を使用したのと同様、享徳年号を使った。享徳年号は二十七年(文明十年)まで使用が確認される(No.12 参照)。



31.3cm × 42.8cm

54 北条家印判状（鷲宮神社文書）

鷲宮、集諸小荷駄、自今日
無相違陣中、可相通者也、

仍如件、

（東印、大内泰秀印）

乙酉
（天正十三年）
八月廿日

堀和伯耆守
（實印）

鷲宮
（大内泰秀）
神主殿

後北条氏が鷲宮神主大内泰秀に、鷲宮に集められていた諸小荷駄を陣中へ送るよう命じた文書である。この文書から、鷲宮が北関東への進出をはかる後北条氏の兵站基地の役割をもたせられていることがうかがわれる。と同時に、鷲宮神主が単なる神主ではなく、鷲宮城主としての側面をもっていることも示している。鷲宮城は鷲宮神社西側の台地上にあり、城には神主大内氏とその家臣、後北条氏家臣団が配されていた。

鷲宮神社参詣

蘇峰生

晩秋の関東平野の眺めも、亦た無味の中に有味の風情がある。我等は所以ありて、去る十九日（昭和八年十一月）埼玉県南埼玉郡鷲宮神社に参詣した。

此の神社は往古より武蔵国に由緒ある神社の一と承る。吾妻鏡などにも、しばしば記載せられたる程なれば、その時代から崇敬浅からぬ神社であつたことが判る。祭神は天穗日命にて、別座に大国主命を合祀している。

凡そ神社の配布の蹟を尋れば、往時に於ける我等祖先の足跡が自から推測せらるる。鷲宮は本来土師宮と称したと云へば、此神社が土師一族と由緒あることが想定せらるる。何れにしても此の神社が、武蔵平原を開拓したる祖先によりて建立せられたるには、それぞれの理由及び事情があるべき筈だ。

神苑の域は八千余坪、附近の民有地を併せて一万坪内外の森林にて、其中には神木と称する巨杉、若しくは高野槇、特に銀杏の大樹が多くて、琥珀色の黄葉は、翠枝と接して、一段の景趣を添へた。

我等は参拝の後に、社宝を拝見した。国宝の刀剣は遊就館に出品中だと聞いた。尤も奇とす可きは文禄四年の棟札だ。一枚の木片だが、多くの史実が掲げてある。古文書は鎌倉時代から室町時代、戦国時代のもの、特に古河公方家、小田原北条実に関するものが多かつた。徳川家康を首として、歴代將軍の朱印があつた。大宮は武蔵一の宮であつたに拘らず、三百石の朱印であつたが鷲宮は四百石の朱印がある。徳川時代、如何に此の宮が繁昌したるかを知るべしだ。

我等は附近の明治天皇の明治二十九年十月二十一日、近衛師団演習御親閲の聖蹟を尋ね、更に当社に保存する十二座神楽中の第四「降臨御先猿田彦細女の段」の演舞を觀、勿々帰途に就いた。

往路は千住から御成街道を經、草加、越ヶ谷、粕壁、幸手等を經。帰路には、岩槻、大宮、浦和、板橋の中仙道を経て、往復共に、晩秋の風物を満喫した。特に翠松に挟まれたる御成街道や、浦和東京間の新道や、新旧の対照、何れも悦ぶ可し。然も帰路は珍らし、も紅輪の関東平野に没するを見、何となく曾て満州に於ける落日を想い出した。旭光も美であるが、落日の美は更に美である。

〔靈樹寺〕

鶯宮駅の北、約七〇メートルにある禪宗曹洞派の寺院で、陸奥国白川関川寺末、鶯宮山鶴松山と号す。開山は法光万室庭拾、大永五年（一五二五）八月十日寂す。

木々に囲まれた小じんまりとした境内に、本堂、庫裏、山門が並ぶ、本堂に安置される木造釈迦如来座像は町指定文化財で、平安末く鎌倉初期（一二世紀）の作。像高八七・ニセンチメートル、面相はまるく穏やか、全体にゆったりとした量感がある。明治の初め、神仏分離のとき廃寺になった鶯宮神社の別当、大乘院から移安したものでいう。

〔停車場設置記念碑〕（東武鉄道伊勢崎線鶯宮駅前）

明治三十五年十月建立

参考文献

写真紀行埼玉の寺 写真 敏蔭英三 文 秋山喜久夫 埼玉新聞社

埼玉大百科事典 埼玉新聞社

新編武蔵風土記稿 内務省地理局

埼玉県市町村誌 埼玉県教育委員会

観光と旅郷土資料事典 人文社

鶯宮神社資料 鶯宮神社社務所

鶯宮神社古文書 埼玉県文書館